

JF大阪市漁協(北村英一 郎組長)は去る11月12日、大阪市内で「第8回淀川河口域を考える会」を開催した。将来に向けた大阪湾・淀川河口域の生物、環境、文化、観光、食について、漁業者をはじめ、研究者、行政機関、市民ボランティアなど約80人が参加して幅広く意見交換。改めて「淀川に触れ合ってもいい、いいイメージをもって、おいしい魚介類を食べてもらおう」という活動内容を確認した。

JF大阪市漁協が開く

淀川河口域での生産性を上げる



畑中氏

冒頭、同漁協の畑中啓吾事務局長が「淀川河口域、淀川、大阪湾の生産性を上げるために、この会を開催している」と述べたあと、過去7回の活動を振り返った。「魚介類の不漁で、生産性向上のため、水産技術センターに依頼した淀川河口域の底質調査結果は当組合だけではなく、多くの人に知ってもらい、学習などで活用され、淀川に触れ、淀川をよいイメージに変えて、おいしい魚介類が食べられるような対策を考えていきたい」と活動を進めてきた経緯を説明した。



吉田氏

また河口域の「場の多様性と連続性」が生物生産環境に重要で、他地域とも情報共有してきた活動とともに、「川と海と人をつなぐ」取り組みとして紹介した。

このほか、淀川の魚介類を味わう会の開催、淀川のアユ・大阪湾のアユ仔稚魚と生息場、シジミの再生に向けた調査、人工干潟の現状報告、淀川大堰(せき)の流量問題などを考えてきたことに加え、今年は大坂・関西万博で、3つのイベントにおいて淀川河口域の生物相や、食味体験の重要性をアピールしたと報告した。



神崎氏

淀川汽水域の干潟を再生

国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の吉田達也地域防災調整官は、「淀川河口域における環境保全の取り組み」について報告した。

阪神なんば線工事で発



系谷氏

漁業の役割(水産物の安定供給・環境監視・環境保全)を説明。海水温の上昇や乱獲、水質問題などが漁協の衰退の原因で

「川と海と人をつなぐ」

第8回淀川河口域を考える会

豊かな大阪湾の実現を目指して

大阪府環境農林水産部と同時期に現場があることを見出し、船とアユがともに生きられる環境があることを表しているとした。

大阪府は、25年の大阪・関西万博、26年の全国豊かな海づくり大会を契機に、「豊かな大阪湾」の保全・再生・創出プランに基づき、水質改善や魚類などの成育の場となるブルーカーボン生態系などの保全・再生・創出を加速し、豊かな大阪湾の実現を目指している。

また、「大阪湾MOBAリンク構想」を推進。大阪湾におけるブルーカーボン生態系(藻場・干潟)のミッシングリンクとなっている湾奥部における創出や、湾南部、西部の保全と再生を、構想に賛

豊富な大阪湾の実現を目指して



吉見氏

同する民間企業や地域団体(25年10月時点、84)などと連携し加速化することにより、大阪湾沿岸をブルーカーボン生態系の回廊(コリドー)でつなぐ構想であると説明。

そのほか、「ブルーカーボン生態系が紡ぐ未来の大阪湾」と題する普及啓発動画を再生しPRした。

船とアユがともに生きられる環境

京の川の恵みを活かす会の中筋祐司副代表は、「アユの課題と魚道づくりとつなぐ」を報告した。

アユの生活史における海の役割と淀川大堰魚道



中筋氏

における稚アユの遡上シリンについてや、11〜25年に設置してきた木製手作り魚道の構造と機能、直立護岸の際際にシラスアユが生息していることなどについて話した。また、

「京淀川鮎」のブランド化へ

大阪料理会の笹井良隆氏は、「淀川河口域食材のサプライチェーンと京淀川鮎の選りすぐる料亭への道程」を報告。

「京淀川鮎」のブランド



笹井氏

淀川河口域環境の課題と対策

最後に、大阪公立大学国際基幹教育機構客員研究員の竹門康弘氏が、総括・質疑・討論、淀川河口域の環境目標と達成手段を述べたうえで、「淀川河口域環境の課題と対策」として、①自然の営力による干潟・浜の再生方法の確立②健全な汽水域を維持するための流量設定③干潟・浜に必要な土砂を供給する仕組み④堆積土砂の管理計画の立案・実施⑤赤潮・青潮・貝毒・悪臭・温排熱などの影響軽減対策⑥生物生産に必要な適量の栄養塩や有機物の供給対策⑦天然資源(自然資本)の持続的利用の仕組みを挙げた。



竹門氏